（8 月 30 日）「出エジプト記 12：37～51」
イスラエルの人々はラメセスからスコトに向けて出発した。一行は、妻子を別にして、壮年男子だけでおよそ六十万人であった。
（出エジプト記 12 章 37 節）

・ファラオの「出て行きなさい」という言葉を受け、イスラエルの人々はスコトに向けて出発しました。スコトはエジプトとシナイ半島の真ん中あたりです。とりあえずエジプトを出るということなのでしょう。
・その数はなんと、壮年男子だけで約 60 万人！ちなみに新しい聖書では「徒歩の男だけで」となっており、どうして女性や子どもだけではなく馬などに乗っている人を省くのか、不思議な気がします。「兵士になりうる数」を伝えたかったのでしょうか。
・430 年の間、イスラエルの人々はエジプトにいました。そのきっかけは、ヨセフが父ヤコブや兄弟たちを飢饉から救うために彼らをエジプトに呼び寄せたことでした。そして今、神さまが自分たちの間を過ぎ越され、エジプトの地から導き出されるのです。

（8 月 31 日）「出エジプト記 13：1～10」
「すべての初子を聖別してわたしにささげよ。イスラエルの人々の間で初めに胎を開くものはすべて、人であれ家畜であれ、わたしのものである。」
（出エジプト記 13 章 2 節）

・神さまはイスラエルの人々に、二つのことを命じます。一つは前の箇所でも書かれていた、除酵祭についてです。7 日間種なしパンを食べ、7 日目に主の祭りをおこなわなければならないということです。
・ただしこれは、「乳と蜜の流れる地に導き入れられたなら」という条件が付けられていますので、これから始まる荒れ野での期間は省かれていると思われます。（本当にそうであったかはわかりません）
・そしてもう一つは、「初子を献げる」というものです。人だけではなく家畜も含めて、すべての初子は神さまのものとなるのです。ただしいけにえとして献げるのではなく、聖別するという意味です。イエス様が献げられた被献日は、この戒めに基づいたものです。

2023 年 8 月

創世記・出エジプト記　　通　読

8 月

（8 月　1 日）「出エジプト記 3：13～22」
神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」　（出エジプト記 3 章 14 節）

・イスラエルの民をエジプトの手から救い出すように言われたモーセですが、簡単に「そうですか」とはなりませんでした。それはそうでしょう。突然命令されても、自分にそのような力があるとは到底思えないからです。
・モーセはまず、神さまの名前を聞きます。エジプトの王ファラオの元で育ってきたモーセにとって、神は複数存在するものでした。だから名前を聞いたのかもしれません。しかしイスラエルにとって、神は唯一でした。
・ですから、「〇〇神」といった呼び名はありませんでした。その代わり「わたしはある」と、自分はどのような神だということを伝えます。これは、「存在し続ける神」ということなのでしょうか。新しい聖書ではこの部分が、「わたしはいる」となっています。

（8 月　2 日）「出エジプト記 4：1～9」
「こうすれば、彼らは先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主があなたに現れたことを信じる。」　（出エジプト記 4 章 5 節）

・神さまの名前を聞いたモーセでしたが、なかなか神さまの言うとおりに行動しようとはしません。新共同訳聖書では 1 節に、「モーセは逆らって」と書かれています。(新しい聖書では「モーセは答えた」とだけ書かれていますが)
・神さまはそこで、二つのしるしを与えます。一つはモーセの杖が蛇に変わるというものです。アダムとエバの物語にも出てきた蛇は、人々から忌み嫌われていました。その「悪魔の象徴」のような蛇を操れば、人々に恐れを抱かせることもできるでしょう。
・また手を懐に入れると、手が重い皮膚病（新しい聖書では「規定の病」）になるというしるしも与えられました。宗教的な汚れを意味するこの皮膚病は、人々に大変恐れられていました。さらにナイルの水を血に変えるしるしまで与えられました。

（8 月　3 日）「出エジプト記 4：10～17」
モーセは、なおも言った。「ああ主よ。どうぞ、だれかほかの人を見つけてお遣わしください。」　（出エジプト記 4 章 13 節）

・モーセはそれでも、イスラエルの民の所に行くことを拒みます。モーセは自分が雄弁ではないことを理由にしました。もし本当にそうであれば、今回の計画に対しては役不足だと思えます。
・しかし神さまは、あえて「口の重い」モーセを選んだともいえます。もしモーセが雄弁であれば、イスラエルの民を導いたのは自分の力だと勘違いするかもしれません。あくまでも導き手は神さまです。モーセはその器に過ぎないのです。
・さらに神さまは、レビ人の兄であるアロンの存在にも触れます。アロンはいったいどこで、どのようにして育てられていたのでしょうか。「赤ちゃんはすべて殺せ」という命令がまだ、出されていないときに生まれたということでしょうか。

（8 月 28 日）「出エジプト記 12：21～28」
こう答えなさい。『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と。」　（出エジプト記 12 章 27 節）

・モーセは神さまが命じた通りのことを、イスラエルの長老たちに伝えます。まず家族ごとに羊を過越のいけにえとして屠ること、そしてヒソプを使って羊の血を入り口の鴨居と二本の柱に塗ることを命じます。
・神さまがエジプト人を打つために行き巡るときに、そのしるしを見て過ぎ越すためです。この出来事を「主の過越」と呼び、それを記念する祭りを「過越祭」と呼ぶことになります。
・もう一つモーセは、長老たちに命じました。それはこの儀式を子孫たちに、掟としてとこしえに守らなければならないということ、そしてその意味を伝え続けなければならないということです。イスラエルの民としてのアイデンティティを守ることが、重要視されるのです。

（8 月 29 日）「出エジプト記 12：29～36」
エジプト人は、民をせきたてて、急いで国から去らせようとした。そうしないと自分たちは皆、死んでしまうと思ったのである。
（出エジプト記 12 章 33 節）

・ついに神さまは、エジプトのすべての初子を打たれます。疫病の災い（9 章 1～7 節）で「エジプトの家畜はすべて死に」と書かれていましたが、今回、家畜の初子もすべて打たれたとあります。どこから湧いたのでしょう。(しつこくてすいません)
・その中には、ファラオの初子（ということは王子で、次期ファラオになるはずだった）も含まれていました。ファラオもこれには耐えられなかったようで、モーセもアロンも、そしてイスラエルの民も羊や牛に至るまで、エジプトから出ていくように伝えます。
・彼らは急ぐあまり、パン種（イースト・酵母）を入れていない生地をもっていきます。それが「除酵祭」の起源です。またエジプト人に金や銀などを求めた結果、エジプト人はその求めに応じます。それはエジプト人が彼らに好意を持っていたためでした。

（8 月 26 日）「出エジプト記 12：1～13」

その夜、わたしはエジプトの国を巡り、人であれ、家畜であれ、エジプトの国のすべての初子を撃つ。また、エジプトのすべての神々に裁きを行う。わたしは主である。 （出エジプト記 12 章 12 節）

・第十の災いをおこなう前に、神さまは「どうやったらその災いを免れることができるか」を指示します。疫病や雹、暗闇の災いなどのときは、神さまはイスラエルの民をご自分で区別させ、そこには被害が及ばないようにしていました。

・しかし今回は違いました。決められた日に、決められた形の食事をおこない、そして家の入口の二本の柱と鴨居に小羊の血を塗るという決められた儀式をおこなうことが定められています。

・これらの様々な儀式が、「～しなければならない」というものとしてユダヤ教には残っていきます。ただキリスト教では、それらの旧約聖書に書かれた決まり事を、ほとんど受け継いでいません。その理由は、使徒言行録やパウロの手紙などで学んでいきましょう。

（8 月 27 日）「出エジプト記 12：14～20」

七日の間、家の中に酵母があってはならない。酵母の入ったものを食べる者は、寄留者であれその土地に生まれた者であれ、すべて、イスラエルの共同体から断たれる。 （出エジプト記 12 章 19 節）

・昨日の箇所には、「過越祭」のやり方が書かれていました。そして今日は「除酵祭」です。その字のとおり、酵母（イースト菌・パン種）を取り除く祭りです。過越祭は第一の月（日本では 3 月か 4 月）の 14 日の夕方です。

・続いて除酵祭は 21 日夕方まで続きます。この二つの祭りはイスラエルの人々がエジプトから解放されたことを記念する祭りですが、いつの間にか過越祭に組み込まれていきました。また十字架の前にイエス様がなさった過越の食事が、「最後の晩餐」と呼ばれるものです。

・これらの祭りには、「これをおこなわないとイスラエルの民から断たれる」という意味がありました。彼らは自分たちのアイデンティティを守るために、様々な決まりを作っていったようです。それがわたしたちに引き継がれなくて、本当によかったです。

（8 月　4 日）「出エジプト記 4：18～23」

主はモーセに言われた。「エジプトに帰ったら、わたしがあなたの手に授けたすべての奇跡を、心してファラオの前で行うがよい。しかし、わたしが彼の心をかたくなにするので、王は民を去らせないであろう。 （出エジプト記 4 章 21 節）

・ついにモーセはエジプトに行き、イスラエルの民を導くことを決心しました。ただししゅうとのエトロには、本当の理由は明かしていません。言うと、止められるからでしょうか。

・モーセは妻と子どもたちと共に、エジプトに向かいました。そのときに神さまがモーセに告げた言葉は、不思議なものでした。「わたしが彼の心をかたくなにするので、王は民を去らせない」。

・逆だったらよくわかります。ファラオの夢を通して神さまがメッセージを送り、平和のうちにイスラエルの民を去らせることもできるのではないでしょうか。しかし神さまはモーセに、このようにまで言わせます。「わたしはお前の子、お前の長子を殺すであろう」と。

（8 月　5 日）「出エジプト記 4：24～31」

主は彼を放された。彼女は、そのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。 （出エジプト記 4 章 26 節）

・24～26 節に突然、神さまがモーセを殺そうとする物語が出てきます。この記事が一体何を意味しているのか、昔から様々な議論がなされてきましたが、結論は出ていません。モーセが神さまに対して、何か悪いことをしたのでしょうか。

・昔、エジプト人を殺したからでしょうか。何度もエジプトに行くことを拒否したからでしょうか。その真相はわかりませんが、ツィポラの（謎の）行為によってモーセが許されたことだけは事実のようです。

・モーセはアロンと出会い、言葉としるしを告げました。アロンにも神さまはモーセに会うように語り掛けているので、話の内容を信じることは難しくなかったでしょう。さらにアロンの言葉としるしによって、民も信じます。さすが年長者、口達者というところでしょう。

（8 月　6 日）「出エジプト記 5：1～9」
しかも、今まで彼らが作ってきた同じれんがの数量を課し、減らしてはならない。彼らは怠け者なのだ。だから、自分たちの神に犠牲をささげに行かせてくれなどと叫ぶのだ。（出エジプト記 5 章 8 節）

・ここからファラオとモーセとのやり取り（交渉）が始まります。一国の王に、奴隷状態の民の代表が相対します。よく会ってもらえたな、とは思いますが。モーセはこのとき、財産などは持っていませんでした。ただ神さまの権威に従っているだけです。
・そして案の定、ファラオはモーセの言うことに耳を傾けませんでした。モーセは三日の道のりをかけて荒れ野に行かせてほしいと願いました。往復では約一週間です。それだけの期間労働力を失うことは、ファラオにとって考えられない事でした。
・ファラオはそこで、命令を出します。その命令は、イスラエルの人々にとっては重荷となることでした。今まで支給してきたわらを、自分たちで集めよというのがその命令です。しかも作るれんがの量は減らさずにです。

（8 月　7 日）「出エジプト記 5：10～19」
彼は言った。「この怠け者めが。お前たちは怠け者なのだ。だから、主に犠牲をささげに行かせてくださいなどと言うのだ。（出エジプト記 5 章 17 節）

・最初の交渉の結果は、散々たるものでした。ファラオはイスラエルの民を去らせるどころか、さらなる重労働を課したのです。たまらないのは労働者です。ただでさえ厳しい仕事がさらに厳しくなったのですから。
・イスラエルの下役たちは、ファラオに訴えました。ファラオが任命した「追い使う者たち」が、重労働を課すことによって罪を犯していると。彼らはその命令が、ファラオから出ていたことを知らなかったようです。
・下役たちは、事の発端が「主に犠牲をささげに行かせてください」という願いにあることを知りました。それもモーセという、自分たちと苦楽を共にしてきた仲間ではない人物が言った言葉のようです。彼らは怒りを覚えたことでしょう。

（8 月 24 日）「出エジプト記 11：1～3」
主はこの民にエジプト人の好意を得させるようにされた。モーセその人もエジプトの国で、ファラオの家臣や民に大いに尊敬を受けていた。
（出エジプト記 11 章 3 節）

・神さまはファラオとエジプトの上に、さらに一つの災いを下すことをモーセに伝えます。これが「第十の災い」になるのですが、今日の箇所にはまだその内容は書かれていません。最後の災いは、かなり丁寧に書かれます。
・神さまは、ファラオがモーセたちをエジプトから追い出すことを明言します。これまでは神さまがファラオの心をかたくなにしていましたが、今回はそうしないということなのでしょうか。
・そしてイスラエルの人々に、隣人（エジプト人）から銀や金の飾り物を求めるように伝えさせます。それも強引に奪い取るのではなく、エジプト人がイスラエルの人々に好意を持つように、神さまが仕向けるのです。至れり尽くせりです。

（8 月 25 日）「出エジプト記 11：4～10」
そのとき、エジプトの国中の初子は皆、死ぬ。王座に座しているファラオの初子から、石臼をひく女奴隷の初子まで。また家畜の初子もすべて死ぬ。
（出エジプト記 11 章 5 節）

・第十の災いは、「初子の災い」です。エジプトの地のすべての初子は、家畜の初子に至るまですべて死ぬという、恐ろしいものです。神さまが深夜エジプトの中を歩むことによって、この災いが引き起こされるのです。
・第九の災いのときに「二度とお会いしようとは思いません」とファラオに言い放ったモーセですが、今回のこの災いのことを言いにファラオの元に行っています。この恐ろしい災いが起こる前に、自分たちを去らせて欲しいという思いもあったのかもしれません。
・しかし神さまは、またしてもファラオの心をかたくなにしてしまいます。エジプトの地に恐ろしいことが起こることを、神さまは望んでおられたのでしょうか。イスラエルの人々にとってはいいのかもしれませんが。

（8 月 22 日）「出エジプト記 10：1～20」
いなごは地表を覆い尽くし、地面を見ることもできなくなる。そして、雹の害を免れた残りのものを食い荒らし、野に生えているすべての木を食い尽くす。（出エジプト記 10 章 5 節）

・「10 の災いシリーズ」も佳境に差し掛かってきました。2 時間ドラマだと、夜 10 時 30 分ごろでしょうか。ここから CM が増えていきます。第八の災いは、「ばったの災い（協会共同訳聖書）」です。何か違和感ありませんか。
・子どもの頃に 10 の災いを暗記させられた方は、「あれ？ばったなんか出て来たっけ？」と思ったのではないでしょうか。新共同訳聖書では「いなご」でしたが、「ばった」に変えられました。いなごは稲の天敵ですが、ばったにはあまりそのようなイメージはありません。
・しかしばったは、エジプトに残った緑のものを食い尽くしたそうです。一匹であれば手に乗せても大丈夫ですが、大量発生するとまあ怖いものです。それでもファラオは反省するようなことは言いますが、心はかたくななままです。

（8 月 23 日）「出エジプト記 10：21～29」
モーセは答えた。「よくぞ仰せになりました。二度とお会いしようとは思いません。」（出エジプト記 10 章 29 節）

・第九の災いは、「暗闇の災い」です。直接の被害がない分、地味にも思えますが、三日間の真っ暗闇は想像もできないほど恐ろしいものでしょう。お互いの顔を見ることができないばかりか、立ち上がることさえできないのです。
・わたしたちは、暗闇に慣れていません。夜中じゅう街灯は光り、24 時間営業のコンビニがあり、「真の暗闇」を経験することはあまりありません。もし 3 日間の暗闇が襲ってきたら、大パニックになるでしょう。
・ファラオはモーセたちに、「行け」と言いますが、羊と牛は残すようにと言います。しかしモーセは、家畜も連れて行くのだと言います。いけにえが必要だからです。交渉は決裂しました。モーセはファラオの前から出て行きました。

（8 月　8 日）「出エジプト記 5：20～23」
彼らがファラオのもとから退出して来ると、待ち受けていたモーセとアロンに会った。（出エジプト記 5 章 20 節）

・イスラエルの下役たちはファラオの元から出てくると、迎えに来ていたモーセとアロンに出会いました。そこで彼らが言った言葉は、「どうか、主があなたたちに現れてお裁きになるように」でした。
・彼らにとってエジプトでの重労働は過酷なものでした。それでも何とか生きていました。ところが「よそ者」モーセの言葉によってファラオは怒り、その矛先が自分たちに向かってきたのです。たまったものではありません。
・モーセは下役をなだめるわけでもなく、神さまに疑問をぶつけます。「神さまに遣わされた者としての自覚が足りない」と言ってしまうのは簡単ですが、神さまの思いを成し遂げようとするときに起こる困難に対する苦悩は、わたしたちも経験あるかもしれません。

（8 月　9 日）「出エジプト記 6：1～9」
そして、わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であり、あなたたちをエジプトの重労働の下から導き出すことを知る。
（出エジプト記 6 章 7 節）

・神さまはモーセに、自分はアブラハム、イサク、ヤコブの神であり、イスラエルの人々の呻き声を聞いて自分の契約を思い出したと語ります。その契約とは、「わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる」というものです。
・「民とし、神となる」というお互いの関係を明らかにしているこの契約は、「双務契約」と呼ばれます。イスラエルの人々にはこの後、「十戒」という掟が与えられます。それを守ることで、「神の民」となるのです。
・モーセは神さまが語ったこれらの言葉を、イスラエルの人々に伝えます。しかし彼らは、聞く耳を持ちませんでした。厳しい重労働のために意欲を失ってしまっていたのです。

（8 月 10 日）「出エジプト記 6：10～13」
モーセは主に訴えた。「御覧のとおり、イスラエルの人々でさえわたしに聞こうとしないのに、どうしてファラオが唇に割礼のないわたしの言うことを聞くでしょうか。」　（出エジプト記 6 章 12 節）

・イスラエルの人々は、モーセの言うことを聞こうとはしませんでした。しかしそれでも、神さまはファラオに対してイスラエルの人々をエジプトから去らせるように言いなさいと命じます。
・モーセは、自分は「唇に割礼のない」と言います。これは意味の分からない言葉だと思っていたのですが、新しい聖書では「話し下手」と変わりました。そのほうが意味はすぐにわかります。
・神さまはモーセとアロンに、なすべきことを語ります。そこにはファラオに対してだけでなく、イスラエルの人々に対して何をすべきかも含まれていました。民の信認と理解を得ないと、物事がうまく進まないからでしょうか。

（8 月 11 日）「出エジプト記 6：14～25」
アムラムは叔母ヨケベドを妻に迎えた。彼女の産んだ子がアロンとモーセである。アムラムの生涯は百三十七年であった。　（出エジプト記 6 章 20 節）

・ここで聖書は、アロンとモーセの系図を載せます。ことあるごとに聖書には系図が出てきますが、それだけイスラエルの人々が家系を大切にしていたということでしょう。ただしここで出てくるのは、イスラエル（ヤコブ）の子のうち、ルベン、シメオン、レビまでです。
・そして特に、レビの子孫について詳しく書かれます。それはアロンとモーセがレビ族の子孫だからです。出エジプト記の 2 章ではモーセは長子のように書かれていましたが、ここではアロンとモーセは兄弟であるとはっきり書かれています。
・二人が本当に兄弟であったかどうかは、今も議論が続いているようです。様々な伝承が組み合わさって聖書は書かれているので、それは仕方のないことでしょう。ただ大事なのは、これからモーセとアロンが主役となってファラオと対峙するということです。

（8 月 20 日）「出エジプト記 9：8～12」
二人はかまどのすすを取ってファラオの前に立ち、モーセがそれを天に向かってまき散らした。すると、膿の出るはれ物が人と家畜に生じた。
（出エジプト記 9 章 10 節）

・第六の災いです。子どもたちのケンカの中で、謝るタイミングを逸してしまい、誰かが仲裁に入って促してあげないと仲直りできないことがあります。ファラオは今、謝るタイミングを完全に逃してしまったように思えます。
・今回は、はれ物の災いです。モーセはファラオの前でかまどのすすを取り、天に向かってまき散らしました。するとそれはエジプトの人や家畜に降りかかって炎症を起こし、はれ物となったそうです。
・昨日の疫病の災いで「エジプトの家畜はすべて死に」と書かれていたのに、今日の家畜はどこから湧いて出たのだろうという疑問は残りますが、疫病でもはれ物でも、ファラオは心をかたくなにしたままでした。神さまが仲裁に入ればいいのに。

（8 月 21 日）「出エジプト記 9：13～35」
雹は、エジプト全土で野にいるすべてのもの、人も家畜も残らず打った。雹はまた、野のあらゆる草を打ち、野のすべての木を打ち砕いた。
（出エジプト記 9 章 25 節）

・第七の災いは、「雹の災い」です。雹とは気象庁の予報用語では、「積乱雲（強い上昇気流によって鉛直方向に著しく発達した雲）から降る直径 5mm 以上の氷塊」だそうです。ちなみに 5mm 未満の氷塊は、「あられ」と呼びます。
・テレビのニュースなどで、車のボンネットをボコボコにしてしまう雹の威力を見ることがあります。コンクリートの建物に隠れることができればいいですが、当時のエジプトでは被害も大きかったことでしょう。
・ファラオは「今度ばかりはわたしが間違っていた。正しいのは主であり、悪いのはわたしとわたしの民である」と反省します。しかし今回も、口だけだったようです。雨も雹も雷もやむと、ファラオはまたしても心をかたくなにしました。

（8 月 18 日）「出エジプト記 8：16～28」
しかし、その日、わたしはわたしの民の住むゴシェン地方を区別し、そこにあぶを入り込ませない。あなたはこうして、主なるわたしがこの地のただ中にいることを知るようになる。　（出エジプト記 8 章 18 節）

・次に第四の災いです。第三のぶよに続き、今度はあぶです。ぶよとあぶの違いは、その大きさにあります。ぶよが体長数㎜なのに対し、あぶは 2～3 ㎝と約 10 倍の大きさを持ちます。そして人の血を吸うという特徴は同じです。
・小さい虫にまとわりつかれるのも鬱陶しいですが、大きな虫が大量に襲って来るのも怖いものです。神さまはこのとき、イスラエルの民が住んでいる場所は区別して襲わないと約束されました。ということはイスラエルの人々は、ぶよには襲われたということでしょうか。
・ファラオは交渉の中で、三日かけて荒れ野を行き、いけにえをささげることを一旦は了承しました。目の前の状況に、耐えられなくなったのでしょう。しかしあぶが去ると、またしてもファラオの心はかたくなになります。デジャブのようです。

（8 月 19 日）「出エジプト記 9：1～7」
翌日、主はこの事を行われたので、エジプト人の家畜はすべて死んだが、イスラエルの人々の家畜は一頭も死ななかった。
（出エジプト記 9 章 6 節）

・続いて第五の災いです。今度は疫病の災いです。ただし今回のターゲットは、エジプトの家畜です。馬やろば、らくだや牛、羊に極めて重い疫病をもたらすと、神さまはモーセに告げられました。
・このあたりになると、「かわいそう」という感情が起きてくるのはわたしだけではないと思います。いくらイスラエルの人々を助けるためとはいえ、家畜には罪はないし、エジプトの家畜を飼う人も被害者にみえます。
・どうしてここまで、ファラオを追い詰める必要があったのでしょうか。争いの火種を聖書が与えているようにも思えてきます。あくまでも、神さまの救いのご計画に焦点を絞って読むべきなのでしょうが。

（8 月 12 日）「出エジプト記 6：26～30」
主が、「イスラエルの人々を部隊ごとにエジプトの国から導き出せ」と命じられたのは、このアロンとモーセである。
（出エジプト記 6 章 26 節）

・系図のあとに、神さまがアロンとモーセを選ばれたことを聖書は伝えます。アブラハム、イサク、ヤコブから続くイスラエルの系図の中に、その選ばれた人物がいることを聖書は明確にするのです。
・28 節以降の小見出しですが、新共同訳聖書では「アロンの役割」となっていたのが、新しい聖書では「モーセとアロンの役割」と変わっています。二人がそれぞれの役割を担うことで、神さまのご計画は実行されるのです。
・しかしなおも、モーセは「わたしは唇に割礼のない者です（新しい聖書では『私は話し下手な者です』）」と断ろうとします。いつまでも逃げようとするモーセの姿が、自分の姿と重なって見えるのはわたしだけでしょうか。

（8 月 13 日）「出エジプト記 7：1～13」
モーセとアロンはファラオのもとに行き、主の命じられたとおりに行った。アロンが自分の杖をファラオとその家臣たちの前に投げると、杖は蛇になった。　（出エジプト記 7 章 10 節）

・神さまがモーセとアロンに命じた役割は、モーセをファラオに対しては神の代わりとし、アロンはモーセの預言者となるということでした。新しい聖書では、モーセをファラオに対して神とし、とはっきり書かれています。
・そして神さまは、同時にファラオの心をかたくなにすることを伝えます。さらにしるしと奇跡をエジプトの地で重ねることも告げます。いわゆる「10 の災い」です。神さまがファラオの心をかたくなにしなかったら、犠牲も減ったと思うのですが。
・彼らが最初におこなったのは、アロンの杖を蛇にするということでした。ファラオの魔術師も、秘術を用いて同じことができたようです。ただし魔術師が出した蛇は、アロンの蛇にのみ込まれてしまいましたが。それでもファラオは彼らの言うことを聞きませんでした。

（8 月 14 日）「出エジプト記 7：14～25」

主はこう言われた。『このことによって、あなたは、わたしが主であることを知る』と。見よ、わたしの手にある杖でナイル川の水を打つと、水は血に変わる。

（出エジプト記 7 章 17 節）

・ここから「10 の災い」が始まります。最初は「血の災い」です。アロンが杖でナイル川の水を打つと、その水は血に変わってしまうという災いです。その結果、川の魚たちは死に、悪臭が辺りを襲います。

・エジプトの人たちはナイル川の水が飲めなくなってしまいます。人間の生活にとって、水は大変重要なものです。しかしファラオは、エジプトの魔術師も同じことができるのを見て、心を頑迷（かたくな）にしました。

・エジプトの魔術師も水を血に変えることができるのなら、彼らは逆に血を水に戻したらいいのにと思ってしまいました。人々は井戸を掘って、しのごうとします。ほとんどの人たちには何の罪もないのに、気の毒です。

（8 月 15 日）「出エジプト記 7：26～29」

ナイル川に蛙が群がり、あなたの王宮を襲い、寝室に侵入し、寝台に上り、更に家臣や民の家にまで侵入し、かまど、こね鉢にも入り込む。

（出エジプト記 7 章 28 節）

・今日の箇所は、第二の災いである「蛙の災い」の予告です。「血の災い」のときは、飲み水が無くなるという深刻な事態でした。しかし今回は、蛙が大量発生するという何とも言えない災いです。

・ムカデの大量発生であれば、刺されたくないから夜もおちおち寝ていられないでしょう。またゴキブリだったら、家族の悲鳴がうるさくて、これまた睡眠不足になりそうです。でも蛙であれば…。

・とは言っても、あのヌメヌメしたお腹が、寝ている顔の上に乗って来たとしたら…。それも一匹ではなく数十匹が「ケロケロ」と鳴きながら、一斉に乗って来たとしたら…。すいません。立派な「災い」です。

（8 月 16 日）「出エジプト記 8：1～11」

ファラオはモーセとアロンを呼んで、「主に祈願して、蛙がわたしとわたしの民のもとから退くようにしてもらいたい。そうすれば、民を去らせ、主に犠牲をささげさせよう」と言うと、（出エジプト記 8 章 4 節）

・昨日の箇所で予告された「蛙の災い」です。アロンが杖をエジプトの水の上に伸ばすと、蛙が這い上がり、エジプトの地を覆いました。ここでも魔術師は同じことをします。それができるなら、蛙を元いた場所に戻せばいいのに。

・今回初めて、ファラオはモーセとアロンに願います。「蛙を追い払うように」と。第二の災いで、ファラオは屈してしまうのでしょうか。モーセはファラオと約束した通り、神さまにお祈りします。

・蛙は家からも庭園からも畑からも死に絶えました。川に追い払われるのではなくその場で死に絶えたために、凄まじい悪臭が放たれました。しかしこれで安心したのか、ファラオはまたしても心をかたくなにします。災いはまだ終わりません。

（8 月 17 日）「出エジプト記 8：12～15」

彼らは言われたとおりにし、アロンが杖を持った手を差し伸べ土の塵を打つと、土の塵はすべてぶよとなり、エジプト全土に広がって人と家畜を襲った。

（出エジプト記 8 章 13 節）

・続いて第三の災いです。神さまはモーセを通じて、アロンに地の塵を杖で打つように命じます。すると塵がすべてぶよとなり、人や家畜につきました。エジプトは乾燥地帯ですから、塵も多かったでしょう。それがすべてぶよになったのです。

・ぶよは体長数㎜の小さな虫です。人間などの血を吸って生きています。蚊が大量発生している藪の中に無防備で入っていったらどうなるか、想像しただけでも全身がかゆくなります。それが逃れる場所もなく、ずっと続くというわけです。

・今回も魔術師は、秘術を使って同じようにしようとしました。ところができませんでした。彼らは「これは神の指の働きでございます」とファラオに告げますが、ファラオの心はかたくななままでした。これ以降、魔術師は同じことをしようとはしませんでした。